

はなかわの風

HANAKAWANO-KAZE
地域連携相談センター広報誌

- 平成 25年5月7日発行
- 発行人：星野充明
- 編集長：綾部潤和
- 企画・制作
花川病院地域連携相談センター
地域連携課



健育会メディカルグループ 理事長賞・ミラクル賞から

医療法人喬成会花川病院が加入する健育会メディカルグループでは、グループ病院・施設の全職員を対象として、「日常業務、非日常業務を問わず質の向上に著しい貢献をした職員に」また、「卓越したチーム医療の実践によって、現代の医学の常識を超えて回復した症例があった場合に」理事長賞、ミラクル賞が授与されます。

今年の下半期に受賞した中から、今回は12月に受賞した花川病院4病棟のミラクル賞の事例をご紹介します（個人情報がないように内容を一部変更しております）。（綾部潤和）

脳幹梗塞後のリハビリリハビリ目的で転院されてきたTさん。体の動きには問題がなかったのですが、飲み込みの機能だけに障害を受け、経管栄養の状態入院となりました。

Tさんやご家族は「口から食べることができるようになりたい。そして職場復帰したい」という強い希望がありました。体は元気。しかし経管栄養の管が鼻に入っている状態では、いままでがんばってきた営業の仕事に戻ることができないからです。

残念ながら、入院時の評価では、Tさんが経口摂取ができるようになるのは非常に困難と評価されました。それを聞いたご家族は早期に胃瘻を作り、栄養を確保する方法を選択したいと考えました。

胃瘻の造設を検討しつつ、それでもあきらめずに言語聴覚士、看護師、管理栄養士がチームで経口摂取ができないかどうか、とりくんでいきました。また、看護部は同様の障害をもった若い他の患者さんと同室にすることを検討してみました。お互いに支えあい、はげましあい、刺激しあうことで相乗効果が期待できないかと…。



同室者の回復していく姿を見て落ち込んだりもしました。でも「病気の先輩」から希望をもらうこともありました。Tさんもがんばりました。こうして、わずか2ヶ月程度で「食べたい」という強いTさんの強い思いが形になりました。経口摂取ができるようになったのです。

Tさんは、無事に自宅退院、復職されました。患者さん自身や同室の患者さんも含めた「医療チーム」を作れたこと、そして「飲み込みの技術」だけではなく環境を整え「食べたい」という気持ちを維持させることが重要であることを、私たちはTさんから学びました。

花川病院のホームページ

<http://www.hanakawa-kyouseikai.or.jp/>

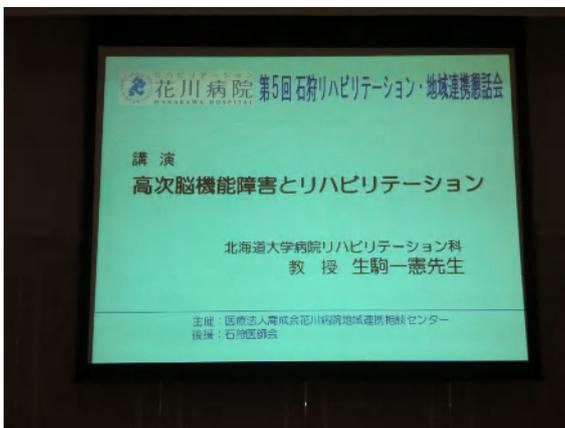
石狩市花川南7条5丁目2番地 (0133) 73-5311

高次脳機能障害とリハビリテーション

石狩リハビリテーション・地域連携懇話会も、第5回となりました。

今回は、北海道大学病院リハビリテーション科の生駒一憲教授を講師にお招きし、ご講演いただきましたのでご報告いたします。

◆見えざる障害 = 高次脳機能障害



高次脳機能障害は、主として脳血管障害に伴う失行、失認、失語などをさしますが、最近では記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害などを主にさすようになってきています。

交通事故や転落による脳外傷が原因であることが多く、麻痺はないか軽度ですが高次脳機能障害が大きな問題となります。

高次脳機能障害は、『見えざる障害』と呼ばれており、受け応えができるために一見普通に見えるという特徴がありますが、新しいことを覚えられない・以前覚えていたことを思い出せない

(記憶障害)、ミスが多い・集中できない・ものを見つけるのに時間がかかる・同時に複数のことができない(注意障害)、計画を立てて要領よく行動できない・予定通りに仕上がらない・約束の時間に遅れる(遂行機能障害)、お金を無制限に使う・ささいなことで感情を爆発させる・人付き合いができない・こだわりが強い(社会的行動障害)、障害を認識できない・否定する(病識欠如)、疲れやすい・覚醒度が下がる(易疲労性)など、その症状は日常生活を営むうえで大きな障害となることが多いです。特に、社会的行動障害は就労の大きな障害要因となるため、リハビリテーションが重要になってきます。

◆高次脳機能障害とリハビリテーション



高次脳機能障害に対するリハビリテーションの基本的な方針は、①認知障害自体の改善 ②代償手段の獲得 ③障害の認識を高める ④環境調整、家族指導の4つです。発症直後は作業療法士、言語聴覚士、臨床心理士などによる医学的リハビリテーションプログラムが開始され、徐々に生活訓練プログラム、職能訓練プログラムへと、医療から福祉への連続した訓練と支援が重要となっています。また、ご本人やご家族を中心に多職種による包括的アプローチが重要であり、そのためには各職種のネットワーク形成が必要とされています。

リハビリテーションの専門家だけが支援するのではなく、医療と福祉の専門職がチームで関わることが求められています。

平成 18 年 10 月より、障害者自立支援法の下、都道府県に高次脳機能障害者への支援拠点機関を置き、地域支援ネットワークの充実を図る目的で、高次脳機能障害支援普及事業がスタートしました。北海道の支援拠点は北海道大学病院リハビリテーション科に設置され、相談支援コーディネーターが医療機関と福祉施設、家庭との連絡・調整や医療及び福祉サービスの提供などの支援を行っています。



高次脳機能障害は、日常生活・社会生活の中で見ただけ、話ただけではわかりにくい障害です。一緒に生活や仕事をすれば、何らかの障害があることはわかるかもしれないが、知識がないとわからない。仕事をしていないのは、怠けていると思われがちです。病院を受診しても、診察や神経心理学的検査だけではわからない。診察＋検査＋周囲の人々からの情報が重要です。正しい知識と理解をもって、高次脳機能障害者支援の普及啓発事業を進めていきます。

◆回を重ねるごとに深まる交流

懇話会当日は、雪のためにJRも運休するような荒天だったにもかかわらず、大勢の関係者が足を運んで下さいました。高次脳機能障害に対する関心の高さをあらためて実感すると同時に、感謝の気持ちでいっぱいになりました。さらに、懇話会に参加して下さった方が過去最高となり、みなさんにとって有益な会となりつつある感触を得ました。今回のテーマであった「高次脳機能障害とリハビリテーション」においても、医療・福祉の専門職がネットワークを作りチームで関わるのが重要であるとい



うお話がありました。当会も回を重ねるごとに、参加して下さるみなさんとの距離が縮まり、いろんなことを話せる関係に近づいているように感じています。そのような関係が、専門職のネットワークに発展し、高次脳機能障害の方が地域で暮らしやすくなることにも繋がっていくといいなと期待が膨らみました。

次回は、平成 25 年 6 月に開催予定です。是非、またご参集いただきますようお願い申し上げます。

(当瀬 恵)

ECOなひととき 保育所バザー

4月16日(火)に花川病院院内保育所「ちびっこハウス」毎年恒例のバザーが行われました。

ちびっこハウスは2012年9月に改築しました。今年は改築後初めてのバザー開催です。

外玄関からかわいい看板に誘われてバザー会場に入ると…普段は乳児室として使われている小さな会場に入りきらないほどの商品が並んでいます。

商品は、おもちゃや食器、文房具やタオル、古着類など、ジャンルを問わず職員が「これは!」と思うものを持ち寄ります。そして、気に入った商品を職員が買います。これぞECO!まさに今の時代に必要なことですね。



バザー開催直後は、掘り出し物を求める職員で商品が見えないほど混雑します。「これはどうやって使うんだろう?」「これ使えそう!」と。

開始から約2時間ほどでバザーは終了です。今年の収益金は¥48,240.-に上りました。また来年のバザーにも楽しい商品が並ぶことでしょう。

(石黒紀代美)

ボランティア活動の報告をします!

花川病院のボランティア活動「カラオケ」のご紹介です。

花川病院では、月に1度1時間カラオケの時間を設けています。カラオケが始まったきっかけは「歌を歌いたい」という患者さんからの要望でした。

カラオケを企画するにあたって、たくさんの患者さんにリサーチしたところ「歌うことが大好き」「歌うのは苦手だけれど聞いていたい」「気分転換したい」と様々なお声をいただくことができました。

手さぐりで企画をして、2012年10月に第1回目の開催となりました。不安の中の開催でしたが…満員御礼です!今では、カラオケを歌うだけでなく患者さん同士のコミュニケーションの場にもなっているようです。

「来月のカラオケは何を歌おうかな～」と毎月心待ちにくださる患者さんのために、今後も未永く続けていこうと改めて思うのです(石黒紀代美)

4月行事予定表				
日付	行事	場所	時間	ボランティア名・内容
8日(水)	喫茶	5階 食堂	14:30～15:30	花川南苑フレア会のみなさん(喫茶)のレジャー、コア・雑談などのお楽しみ物をご用意しております。
18日(水)	カラオケ	5階 A会議室	15:30～16:40	みんなで楽しくカラオケしてみませんか?聞くだけの方もお待ちしております!
25日(水)	陶芸教室	オアシス21	13:00～14:00	花川ボランティアのみなさん 陶芸をとおして世界に一つだけの作品を作ります。陶芸は初めての方も大歓迎!作品が出来上がります。

編集後記

はじめに報告です。この3月をもって、花川病院地域連携相談センター看護師の当瀬恵が退職いたしました。たくさんの病院のナースステーションにお邪魔し、まさに「おばさんの連携」スタイルで、患者さんのために、どこにでも「割り込んで」いきながら連携を取らせていただきました。今号の中記事が最後の仕事となりました。長い間お世話になりました。ありがとうございました。

さて、今後は保健師を配置する予定です。また新しい顔がきまりましたら紹介させていただきます。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。(綾部潤和)